

る可能性が高いだけでなく、「文部科学省検定済」というお墨付きにより、「学校教科書」という枠組みを超え、公的な認識として扱われる。科目「倫理」について考える際、「倫理」教科書の記述の検証は不可欠である。

この「倫理」教科書の記述に大きな影響を与えているのが、『学習指導要領』ならびにその解説書『学習指導要領解説 公民編』である。その影響力の大きさは、ほとんどの「倫理」教科書が、『学習指導要領』の提示する項目立てに沿った構成を取っていることから窺える。『学習指導要領』では、インド仏教と日本仏教は、それぞれ異なる項目で取り扱われているが、それら個々の項目には、別々の「ねらい」が設定されている。それぞれの項目の「ねらい」を対比すると、『学習指導要領』は、インド仏教を教える項目について、一人の「人間」としての在り方生き方を考えさせることを目的として設定する一方、日本仏教を教える項目については、国際社会に生きる「日本人」としての在り方生き方を考えさせることを目的として設定している。

『学習指導要領解説 公民編』は、インド仏教・日本仏教を教えることについて、『学習指導要領』よりも具体的な解説を加えている。各々についての解説を対比すると、インド仏教を教えることに関しては釈尊の言行、すなわち仏教の「原初」の姿が強調されているのに対し、日本仏教を教えることに関しては「日本独自」の仏教受容に重点が置かれていることが分かる。これら二点を強調することは、「仏教」について、分裂したイメージを生徒に与えかねない。

教科書の記述については、二つの大きな問題点が挙げられる。一つ目は、教科書の記述そのものに誤りが散見されるという問題である。例えば、梅原猛氏の造語である「山川草木悉皆成仏」が最澄の言葉として紹介されていることや、「自力本願」という用語が用いられていることなどが挙げられる。二つ目は、教科書が、日本仏教の各宗派を、宗教ではなく、日本思想史あるいは文化史の一要素として扱う結果、発展史的な見方から、それぞれの宗派を序列化する立場に陥りやすいという問題である。例えば、一部の教科書は、鎌倉期の祖師たちによって、仏教の「日本独自の受容」が完成したという立場にたっているため、奈良・平安期の仏教を低く位置づけるかのような記述が見られる。また、鎌倉期までの祖師たちによる仏教の受容を重視して教える立場は、結果として、それ以後の日本仏教を軽視する態度でもあることにも注意が必要であろう。

「心のノート」の可能性と限界

——官製スピリチュアルのほころび——

弓山達也

二〇〇二年、文科省より「心のノート」と呼ばれるワークブックが全国の小中学校に配布された。この「心のノート」には、既成の道徳副読本と比べて「自己」「他者」「自然・崇高さ」「集団・社会」に関する踏み込んだ記述が散見され、一部は宗

パネル

教的情操や普遍的な宗教心とも重なる性格をも有していた。

本報告の目的は、「心のノート」に示された見えない宗教的次元を含む道徳性を官製スピリチュアリティと措定し、この見えづらさに取り組む教育現場の代表的な議論・実践を検討することにある。そして教育現場では、この見えない官製スピリチュアリティとどう可視化するかが問題となるが、これを整理することにより、宗教的次元を含む道徳性をどう伝えるか、その課題が明らかに異なるに違いない。

「心のノート」は、「いのち」観のような扱いづらいテーマにも大胆に踏み込んで定式化している点が際だっている。「心のノート」の可能性と限界はかなり明白で、それまで副読本を読んで感想を書いておしまいであった道徳の授業に、机上とはいえ実践性をもたらず、このワークブックは、文科省初等中等教育局長によれば「児童生徒が身につける道徳の内容を、児童生徒にとってわかりやすく表し、道徳的価値について自ら考えるきっかけとなるもの」である。他方、教育現場では、「わかりやすさ」（とつつきやすさ）の反面、その抽象性ゆえに使いづらさや、具体的な議論に引き落とした際、報告者がファシリテートした小中高の教員研修でも指摘されたような「価値の押しつけ」が危惧されることとなった。こうした官製スピリチュアリティのほころびゆえに、京都府が「心のノート」の地域版として『京のこども 明日へのとびら』を作成したことは自然なことであろう。かかる京都府下の道徳教育モデル校での試みを整理すると、宗教的次元を含む道徳性をどう伝えるかについての課題は次の三点にまとめられる。

①「心のノート」のように全国区での使用を念頭に置いた教材は必然的に抽象的な内容にならざるを得ない。かかる見えづらい官製スピリチュアリティを具体的な見える形にするためには地域性をテコに地域スピリチュアリティのレベルに落とし込むことが有用である。

②しかし地域性のレベルにしたからといって宗教的次元を含む道徳性が伝わるとは限らない。「心のノート」と同様に教育現場で持て余し気味が伝えられる総合的な学習も、単に地域の人に話を聞くだけでは、不毛な時間つぶしに終わる危険性もある。地域性をめぐって家族・郷土・歴史といった具体的な事例の学習と家族愛・郷土愛・伝統への愛着といった抽象的理念に思いを凝らすこととの往復運動が、より有効な道徳教育となりうる。モデル校が単発の授業やイベントに終わらず、学期をまたがり、しかも総合単元的に道徳教育をとらえているのはそのためである。

③本報告では京都に焦点を当てたが、このような歴史的な特性を有する地域はむしろ稀で、ニュータウンや大都市に共有すべき地域スピリチュアリティがあるかという心もとない。また地域スピリチュアリティ自体も価値の多様化・相対化の中で必ずしも共有されることも限らない。モデル校では保護者などから違和感が表明されたケースを聞かなかったが、地域スピリチュアリティもまた官製スピリチュアリティと同様に、「価値の押しつけ」の危惧にさらされているといえよう。その意味で、抽象的な道徳的価値の具体化への道筋は、地域性に限らず常に複線的に模索される必要があるのだろう。